
一陽峯

筆者は、1998年から2000年の末まで、南アフリカ共和国（以下、南ア）ステレンボッシュ大学の教員として働く機会に恵まれた。南アにはさまざまな歴史都市があるが、ステレンボッシュほど外部の印象と内部の実像がずれている街は、珍しいかもしれない。本稿では、20世紀末の時点においてステレンボッシュが経験していた変化の諸相を、地元で生活した観察者の立場から記録しておくことにしたい。

1 ステレンボッシュの三つのイメージ

ステレンボッシュは、南アではケープタウンの次に古い白人入植地である。17世紀後半以降、ケープ植民地のフロンティアが内陸に拡大するにつれて、ステレンボッシュは行政上の要地として栄えた。今ではケープタウンから車で40分だが、昔の人々は牛車で3日かけて移動していたという。

現代のステレンボッシュには、およそ3種類のイメージが抱かれている。一つは、世界的に有名

な「ワインの街」のイメージである。ステレンボッシュの周囲の丘陵地にはフランスの田舎を思わせるぶどう畑が広がり、ここと北隣の街パール、東隣の村フランシュフークは、南アのワイン首都として、極上のワインメーカーを集めている。農場の背後には岩肌をむきだしにした雄大な山々が並び、夕暮れ時、垂直に切り立つ岩盤が紫色に染まる姿は圧巻である。ホテルやB&Bの設備も整っているため、ここにはドイツやアメリカからも大勢の観光客が集まる。

ステレンボッシュの二つ目の横顔は、「学問の府」である。南アには主要な大学が21校あるが、南ア最高のエリート大学のひとつステレンボッシュ大学の起源は、1685年に設置されたオランダ改革派教会の付属学校にまでさかのぼる。1918年に国立の総合大学となったステレンボッシュ大学は、人文学部、経済経営学部、法学部、神学部、教育学部、理学部、工学部、農林学部、医学部、歯学部、軍事学部の11学部で構成される。キャンパスの周囲は比較的治安がよいので、パブや友人の下

宿で酒を飲んだ学生たちが、深夜でも街を彷徨している。朝になると、自転車通学の学生たちが並木道を駆け抜ける。ステレンボッシュは、学生の活気に満ちた街である。

ステレンボッシュの三つ目のイメージは、「アフリカーナー人種主義者の牙城」というものである。実際、1919年から78年まで、南ア白人政権の歴代首相は、全員がステレンボッシュ大学のエリート卒業生であった。ステレンボッシュ大学は、新体制の成立後も学部レベルでアフリカンス語教育の大原則を残している唯一の大学として、「アフリカーナーの心のふるさと」と呼ばれる。そのぶん、南アで初めて出会った人々（とりわけ黒人）に「ステレンボッシュから来ました」というと、相手が絶句し、しばらく会話がとぎれてしまうことがある。

2 ローカルな政治空間の拡大

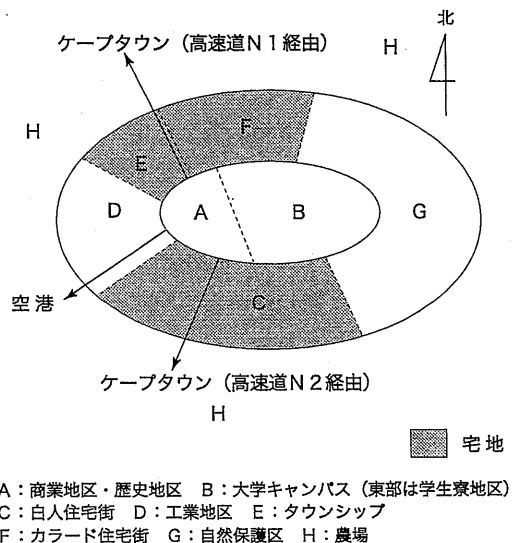
というわけで、ステレンボッシュというエリートの的で保守的だというイメージがつきまとうのだが、いざ自治体選挙となると、意外なことにANC（アフリカ民族会議）の力が強い。1996年に実施された民主化後初の地方自治体選挙ではANC系の議員が多数派を占め、ステレンボッシュ市長にもANCの黒人政治家が就任した。2000年12月の最新の地方自治体選挙では、ANCは与党の座こそ失ったものの、反ANC政党DA（民主連合）の15議席に対して14議席と、ほぼ拮抗している。進歩的とされるケープタウンよりも、保守的とされるステレンボッシュの方がANCの支持率が高いという事実は、隣のケープタウン市民にさえほとんど知られていない。

どうして、このような奇妙な現象が起きるのだろうか。ステレンボッシュという空間の住民構成

を考えると、理由はすぐに見えてくる。図は、ステレンボッシュの都市空間構成を簡略化して示したものである。この図の中心および南方（A, B, C, D）が「表のステレンボッシュ」だとすれば、北方（E, F）は「裏のステレンボッシュ」にあたる。「影」にあたる北部の存在は、しばらく住んでみないと実感できない。

ステレンボッシュの白人向けの観光業や大学関連産業（A, B, およびH）は、非白人住民にも多くの雇用機会を提供している。事務系の末端労働者の大半はカラードである。グルメを満足させる高級レストランでは、客の視線が向かないように隔離された厨房で、黒人労働者が汗を流す。ステレンボッシュでは食品加工業などの製造業も盛んで、工場群が国鉄の駅周辺に並んでいる（D）。さらに周辺のぶどう畑（H）では、住み込みの農場労働者（多くはカラード）に加えて、収穫期には大量の追加労働が必要になる。また、南部の白人住民（C）は黒人女性をメイドとして雇用する。

ステレンボッシュの空間構成



北部の丘陵地は、これらの非白人労働者を隔離する「ため池」として機能している。ジョハネスバーグにソウェトがあるように、ステレンボッシュにはカヤマンディ（E）がある。1941年設立の黒人居住区カヤマンディ（“pleasant home”）は、1927年に設置されたケープタウン近郊のランガに次いで、このあたりでは2番目に古い歴史をもつタウンシップである。白人右翼に暗殺された南ア共産党書記長クリス・ハニの叔父は、カヤマンディで暮らす出稼ぎ労働者だった。老人も子供も、ここでは誰もがコーサ語の話者である。

幹線道路を隔ててカヤマンディの東方には、クルーテスヴィル、イダスヴァレーといったカラードの居住地が広がる（F）。カヤマンディと比べると面積が広く、中古車を所有している家庭も多い。しかし、南部の白人住宅街のようなプール付きの家は見られない。質素で活気ある労働者階級の住宅街である。1950年代まで、現在の大学キャンパスや白人居住地にもカラードの居住地が点在していたのだが、これらはアパルトヘイトの時代に強制移住の対象となり、現在のカラード街に統合されてしまった。

ステレンボッシュの人口は、大学生が2万人弱、それ以外の市民については白人が3万人、カラードが3万人、黒人が3万人弱と推定されている。アパルトヘイトの時代、完全な選挙権を有していたのは白人だけであった。しかし、1994年に一人一票の選挙権がすべての人種集団に広がったため、ステレンボッシュ自治体の政治空間は一気に拡大することになる。ステレンボッシュでは、ケープタウンと違って、黒人だけでなくカラードの間でもANCの影響力が強い。こうして、新体制の成立とともに、裏のステレンボッシュが一気に政治的な重みを増したというわけである。

3 大学改革の波

このように「ステレンボッシュ市民」のおよそ半分は非白人なのだが、ここの大学キャンパスを歩く学生については、いまだにおよそ8割が白人である。全国の黒人学生がステレンボッシュを敬遠する第一の理由は、教室での授業言語がアフリカーンス語だということにある。

アフリカーンス語は、一般にはオランダ系白人（アフリカーナー）の言語だと考えられている。だが、ウェスタンケープ州の文脈では、アフリカーンス語を「抑圧者の言語」として切り捨ててはできない。この州では人口の約55%をカラードが占めており、そのカラードの大部分の家庭内言語はアフリカーンス語だからである。カラードの中産階級は英語を自由に使いこなせる（したがって子弟を英語系の大学に送り込める）が、カラードの底辺層はアフリカーンス語しか理解できない。歴史的な起源としては、アフリカーンス語は白人の言語というより、奴隷や先住民の間から発達してきた「クレオール」である。

ステレンボッシュ大学の主導的教授言語がアフリカーンス語であることは、法律で規定されている（1992年の「ステレンボッシュ大学法」）。つまり、ANCが多数派を占める国会で法改正が行われれば、この言語規定は一夜にして覆されるわけである。さらに、南アの大学は原則的にすべて国立大学であり、中央政府の補助金がなければ大学の存続は不可能である。したがって、ステレンボッシュ大学がアフリカーンス語教育にこだわろうとすれば、同時に「保守派の牙城」を新生南アに貢献する民主的な大学へと変革し、その成果を政府に見せなければならない、ということになる。

この課題に応えるために、第1に、大学はカラー

ド学生の呼び込みに本腰を入れ始めた。農村部の成績優秀な高校生を主な対象として、大学は専門のリクルート職員を配置し、勧誘に力を入れている。全学生に占めるカラードの割合はまだ10%程度にすぎないが、黒人学生と違い、カラード学生の場合は言語の問題がないので、今後の学生数の増加が期待されている。

第2に、通信教育の拡充の動きがある。最新のテレビ授業を駆使した遠隔地教育（英語）を受けると通信教育生の大半は、教育学部に籍を置く全国の黒人学生であり、その数は3666人に達する（学部学生と院生をあわせた総学生数2万1756人の約17%）。この全国に散らばる通信教育生を頭数に入れると、ステレンボッシュ大学の学生全体に占める白人学生の比率は、68%にまで下がる。

第3に、大学院教育レベルでは、英語教育を原則とする動きが広がっている。大学院生8347人だけを取り出すと、黒人学生が36%、カラード学生が9%であり、白人学生は52%にすぎない。白人学生や黒人学生といっても、なかには欧米や他のアフリカ諸国からの留学生もいる。学生たちが人種を越えて談笑する姿が日常的に見られるのは、このコスモポリタンな大学院生の層である。

ステレンボッシュの学生は、全般的にまじめである。筆者は政治学科の学部3年生に「日本の政治経済」を教えたが、授業中に私語をする学生がいると、周囲の大勢の学生が「シー！」とサインを送って、黙らせる。進級は難しく、3年次までに入学生の半分から3分の2が脱落する。半年の1単位の授業で筆記試験が2回、小論文2本、中論文1本、それにディベートなどが課され、期末試験の時期には多くの学生がやつれた姿で登校する。

大学院生のゼミの雰囲気にも、気合いが入っている。筆者のゼミには社会人生活を経験した年輩の黒人学生がいて、毎回の授業が楽しみだった。もうひとつ、ステレンボッシュで驚いたのは、女子学生が多いことである。2000年度の全学生の内訳は、女子学生が1万1442人、男子学生が1万314人と、初めてジェンダーの比率が逆転した。高等教育への女性の進学率の上昇は世界的な現象だが、それにしても、この変化は印象的である。

おわりに

ステレンボッシュ大学の最近の動きをみていると、巨大な船が大きく進行方向を変えつつあるような印象を受ける。急に舵を切ると転覆するが、のんびり構えていると障害物に衝突する。容易に想像できるように、キャンパスの少数派学生や地元の底辺労働者のあいだでは、変化のペースの遅さと「白い秩序」に対する不満が渦巻いている。

とはいえ、ステレンボッシュ大学の学術水準と生活インフラの質の高さは、やはり特筆に値するだろう。アフリカ大陸トップクラスの研究と教育の質を維持しつつ、その担い手を地域社会の人口構成の実態にあわせて多様化できるかどうか、この大学の、そしてこの街の未来の鍵を握っている。南ア研究が専門ではない読者の方々も、ぜひ一度はステレンボッシュをご訪問いただき、白人到来以前は先住コイサン人だけが見上げていたはずの雄大な山脈を眺めつつ、ヨーロッパの伝統の殻を破ろうとするアフリカの息吹に触れていただければと願っている。

（みね・よういち／中部大学国際関係学部）